

存在への嘔吐

- 突然「存在」そのものを意識
  - 吐き気するほどの違和感
  - 世界の本質に気づいてしまった
- 主人公ロカンタン — 歴史研究家
- 物ごとの意味や秩序
  - 実は人工的なもの
  - その奥には無意味な存在がある



孤独と他者の壁

- ロカンタンの嘔吐 — 人間関係にも影響



ブーヴィルの町での交流

- 図書館の常連客「独学者」
- 恋人アニーとの再会
- ⇒ 偽りの関係と気づく

無意味からの創造

- 具体的な希望
  - 世界に意味がないと悟りつつも
  - 芸術によって意味を創り出す道
- カフェで聴いた曲 — 一時的に「嘔吐」を鎮める
- ロカンタン
  - 伝記執筆⇒小説家へと転身
  - 創作を通じて新しい価値を生み出す
  - ⇒ 選択と創造の自由（実存主義の希望の源）

